【中学校の部・優秀賞】

いのり

南城市立大里中学校
三年　比屋根　憲太

平和の礎には
国籍、軍人、民間人を問わず
沖縄戦で亡くなられた
一人ひとりの氏名が刻銘されている

小学生の頃
祖母に手をひかれ
礎をゆっくりと歩いてまわる
時折立ちどまり
出身地を確認し
名前をなぞる…
「おばあちゃん、知っている人？」
「知らない人よ。名前が似ているね」
そういって僕の手をゆっくりとはなし
腰をおろし、両手を合わせる
僕は急いでかがみ真似をした
親戚や友達を思い出していたのだろう

戦争中
祖母は十六才だった
姉を目の前のごうで亡くし
自らも首と腕に戦争の傷跡がのこる
戦争中は
逃げるのが精一杯だった
生き延びるのに精一杯だった
こわいとか悲しいとか
戦争が終わってずいぶんたってから
わいてきたという
人の心は無くなっていたという
なかなか戦争の話をしたがらなかった祖母
やっと話を聞けたのは
七十八歳だった

一年一年…
歩くことが困難になり
車イスで
持ってきたキクの花を
たくさんの礎に少しずつたむけていった

祖母の
礎をさすり
礎をだきしめて
声を震わせる姿を何度も見てきた
「憲太
命ドゥ宝って言葉知ってるね
命が一番大切さぁー。
命がないと何にもできないからね」
あたたかい風が
祖母の涙と声を震わせる

歩いてきたときも…
車イスできたときも…
最後は
礎の先の
真っ青な空
リゾート地にない
静かな海へ向かう
僕の手を強くにぎり
「戦争をしていいことは
何にもないさー
勝った国も
負けた国も
たくさんの人が亡くなったからね
なんにもいいことはないさー」
僕も強くにぎりかえす

中学生になると
祖母はこの礎に来ることはなくなった
僕のこともわからない
去年もおととしも両親は祖母のように

少しの花をかい
少しずつ花を分けてたむけた

「おばあちゃん
僕は忘れないよ
戦争で勝った国も、負けた国も
たくさんの人が亡くなったこと
そして
戦争は人の心をなくすこと
おばあちゃん
僕はいのるよ…
戦争のない平和な国を
平和が永遠に続くことを」